

論文内容要旨

論文題名：作業療法士が作業に焦点を当てた実践を行う状況

専攻領域名：精神障害リハビリテーションとケア領域

氏名：日向裕二

内容要旨

目的：本研究の目的は、作業に焦点を当てた実践（以下；OBP）を行っている作業療法士（以下；OT）が考える 1) OBP を行いやすくする条件、2) OBP を行いにくくする条件、3) OBP の意義、を抽出し、OBP が行いやすい状況がどのようなものかを明らかにすることであった。

方法：本研究の選定条件に合致し、かつ本研究への参加に同意が得られた研究対象者を計 9 名（男性 5 名、女性 4 名）選出し、半構造化インタビューを行った。得られたデータについて質的・帰納的に分析を行った。なお、本研究は、昭和大学保健医療学研究科人を対象とする研究等に関する倫理委員会にて承認を得た（承認番号：第 486 号）。

結果：OBP が行いやすい条件は①〈他者との関わりがスムーズに進むこと〉、②〈OBP を行う環境的・物理的資源があること〉、③〈クライアントの状況が OBP に合わせやすいこと〉、④〈セラピスト自身に OBP 成功への手がかりがあること〉であった。また、行いにくくする条件は①〈他者との関係性が円滑に進まないと感じること〉、②〈環境的・物理的資源が制限されること〉、③〈OBP よりも優先される要因があるため〉、④〈OBP の捉え方が難しくなること〉であった。さらに、OBP を行う意義は①〈クライアントのためになるから〉、②〈作業療法のアイデンティティがあるから〉、③〈OBP 自体に魅力があるから〉、④〈心理・精神的な報酬が得られるから〉であった。以上のことから、本研究において、OT は日頃から「クライアントによる主体的な作業の継続」を念頭に置き、種々の工夫をしつつ OBP を実施するための努力をしていること、OT 自身が OBP を行いたいという思いが継続されることが重要であることが判明した。このため、OBP を行う意義とは、OT としての必要性を明確にし、実践をするうえで、他の職種にはない OT 独自の報酬が得られ、さらなる内発的動機づけを高めていくことが明らかとなった。これは OT が OBP を実践してくことを後押ししていくと考えられる。

結論：まだ OBP の実践が難しいと感じている OT や、これから OBP を実践していきたいと考えている OT、これから OT となり OBP を実践していきたいと考えている学生などにとっての後押しとなることを期待する。